

初ゆめ 2 若井 勲 夫

私は、いつか夢の中に入っていた。

新しくできた教養部図書館が立っている。まず、調べものをするため、目的の本を幾冊か借り、個室の学習室に向う。ここは、周囲の騒音から閉ざされ、静かに勉強できる。自分の部屋のように感じられる。辞典を見たいときは、資料室に行けばよい。そこには、年鑑や新聞の縮刷版なども備えられている。

閲覧室に行く。ここは、ただの自習室、あるいは談話室などになり下っているような現状とは違って、本来の面目たる本を読む部屋である。椅子はソファである。採光はは十分、暖房もきいている。お茶の用意まであり、机には花が飾ってある。部屋の中は静かで、楽しい雰囲気の流れている。本はすべて開架式である。室に入るときは、必要なもの以外の持物は、ロッカーに収めることになっている。目録室も部屋として独立している。ここには本は、書庫に安全に保管されている。貸出は、館内では5冊、館外では2冊。休暇中は5冊まで借りられ、この点大変便利である。また、事務員の休憩時間も、11時半から12時半までになり、昼の休憩時間に利用したいことの多いわれわれには都合がよい。それに、事務員は、図書館業務によく通じ、レファレンス・サービスも行きとどき、親切である。

隣りは自習室である。ここは、図書館の本と関係なく自分の勉強をするところである。自習室は本来の図書館の任務ではないのかも知れないが、この部屋は広く、机ごとに蛍光灯が備えつけてある。

次の部屋は、談話室である。学生会館もなく、憩う場もなく、緑も少ないこの学校にとっては、格好のものである。ステレオまで置いてあるのには驚いた。連日満員の状態である。

なかに、会議室や小講堂もある。本当

に、学生のための図書館ができた。これで教養部生も大分救われることであろうと考えながら外に出た。まま子扱いにされてきた教養部の未来も明るい、と思ったところで夢からさめた。私は、すぐさま、よき時代の、よき三高生の愛した今の図書室を思いやるのであった。(文学部2回生)

図書館の味 坂本 正子

大学へ入って以来、今まで、1日中図書館にいた日が幾日あったろう。1回生の春休の時だった。2月の末から3月20日頃まで、毎日開室9時から夕方5時まで“図書館の人”となったことがあった。

“図書館の人”はそれ程多くはなかった。しかし試験期のあの雑然とした部屋の状況とは少しく趣を異にしていた。誰も静かであった。ジッと視線を前にすえて何かを思いをめぐらしている人を何度も見た。このただ広い、しきりのない部屋の中で、目に見えぬ壁を作って個室に1人、懸命に学習している人達はその半数であった。私にはその情景を見るだけでも図書館通いが楽しく有意義だった。1日の学習を終えて帰る道は、さすがに心が清々しい。1日の学習が更半紙の中に蓄積される。それが何ともいえず心を満たしてくれたのだ。

人類の起源、生命の起源、さらにさかのぼって地球の起源、宇宙の起源等、起源の問題を頭だけで、しかもありったけの力を出して考えた。3月20日になると更半紙が60枚たまった。その中にあの時の私の全てが秘められている。学校にあって、勉強したり、合唱をやったりしながら、時々暇な時に引っぱり出してみるこのノートを眺めながらそう思うのだ。

それ以来私は図書館の味を覚えた。

時折、府立資料館へ行ってみると、この本部図書館に比べて、格段の設備の良さ。全館暖房、室温16度、素晴らしい明るさ。そのひとつひとつに何か面喰う思いがする。でもやはり“図書館の味”があった。